記念講演

「巨大プロジェクトの取り組み方」

日本生産性本部 理事
西堀栄三郎氏

只今御紹介に預かりました西堀でございます。私が韓国に参り「科学の統一に関する国際会議」に出席しました時に、文鮮明先生から世界の平和を築く為の国際ハイウェイ計画のお話を伺いまして大変感銘致しました。以来この問題には、私も非常に心を燃しておる者の一人でございます。どの点にであるかと申しますと、この計画にはロマンがあるからです。人類というものは、今までロマンで生きてきたのではないかと思って居ります。学問にしても、或いはいろいろ大きな仕事にしても、みな何か雄大なロマンというものを持ってやってきた。これは人類が他の獣類と違って、強い強い探求心があるからかもしれないと思って居ります。これは単に私や冒険家と称せられるような人間が持っているだけではなく、全人類の持っている共通な本能かもしれないと思うものです。このロマンを追うということは、その方々の環境や教育やいろんなことから、必ずしも十分に発揮し得ない方もございますけれども、やはり心の奥底には誰しも持っているものだと私は信じております。今日まで、私もこのロマン或いは夢、或いは一つの巨大な憧れとでも言うべきものを好んでおる人間でございます。その小さな現れが、南極の最初の越冬隊長になってみたり、或いはヒマヤラに行ってみたり、いろいろなことに携わったのであります。またサイエンス、科学の問題につきましてもいろいろ勉強させて頂きましたし、更に原子力船『むつ』の設計にも携わりました。これらのことは、新しいものを求める、ロマンを求める心の一つの現れでないかと、自分自身感じております。

これらの夢を実際実行しようと致しますと、いろいろな困難に出遇います。言いかえれば、果してそんなことができるのかという懸念もございます。しかし考えてみますると、そういうロマンはいつか必ず叶えられてきているのではないかと思います。しかも、それは決してそんなに簡単な、すぐに儲かるとか、利益に繋がるとか、そういう実利的な意味のものではない。

考えてみますと、人類がかつて考えたことのない宇宙に飛び出していって、月の土を踏んだアームストロングという男がおります。「一体あれは何の為になるんだ」「あれをやると儲かるのかい」というようなことを言う人もございます。しかしこのロマンを求めて進むというのは、そんな右から左に実利が伴うというふうな性質のものでは勿論ありません。夢でありますから、その夢が叶えられるか叶えられないかもわからない。ましてやそれがうまくいかず、大失敗をするかもしれない。大変リスキィなものであります。リスクをすぐ危険というものと結びつける。そしてそういうことを好んでやろうとする人間を捕まえて冒険家と言う。私は正直に申しますと、冒険家と言われるのは大嫌いであります。確実にそれがやれるんだということを、やはり十二分に調査してやることでありますから、決して冒険ではない。危険を冒すということではないんだと、少なくとも自分自身はそう思っています。それは綱渡りをしている人を外から眺めておりますと「危ないことしやがるなあ、無茶な冒険やな」こう思われるでしょうけれども、やっている御本人は十分なトレーニングをし、長い修行を積んで居ります。綱渡りをやっている時は、綱の上を平然と普通の道を歩くのと同じような気持で歩いているのに違いない。決してそれを冒険とは彼自身は思っていないと思います。

私はビックプロジェクトをやろうということになれば、「心構え」というものが絶対に必要だと思っています。今日皆様方の前で、こういう巨大プロジェクトの取り組み方という大きな演題を頂戴致しましたけれども、この日韓トンネル自身に関し申し上げる力はございませんが、私のささや

かな経験というものをお聞き頂いて、その中から本当に大きな巨大プロジェクトをどうしてやったらいいかということについて、御参考になるのならこれは大変私は嬉しいと思います。

私は道路の専門家でもございません。交通の専門家でもございません。またトンネルを掘る専門家でも何でもありません。只、今申しましたようにロマンを追って、何事でもやっていく。従ってそれが何であっても同じなんだと。つまり専門が私にはないようなものです。おまえの専門は何だと言われたら、専門がないのが専門ですと言わなければならないような立場なのです。だからと言って私は専門家というものを、非常に大切にしなければならないと思っています。しかしながら専門というものに捉われて、非常に狭い狭いものではいかんのだと考えています。ビックプロジェクトをやる為には、いかなる専門の方々でも受け入れる幅がなくちゃいけない。何でもやらなければいかん。ジェネラリストでなければいけないということを、自分で言い聞かせております。「なるほど西堀君は何でもやるなあ。本当に何でもやるなあ。そのかわり薄いわなあ。」と言われる。広ければ薄いということになるのでございましょうけれども、私は広くて深くなくちゃならんと思って、それは不可能でないと思っているのです。それは勿論、より深くという言葉を使わせて頂くしかありませんけれども。それは結局人間のキャパシティーといいますか、能力と言いますか、そういうものに限界があると思わないのであります。だいそれた話だと思われるかもしれませんが。しかし少なくともそう思わなければいけない。

私この度、日本生産性本部から、ちょっとささやかな本を発行致しました。その本の題は『五分の虫にも一寸の魂』何か逆さまと違うかと友人から注意を受けました。五分の小さな虫にでも、その体以上に大きな魂があるんだよ。つまり魂というのは人間の持っている精神能力である。だからあの文鮮明という方、私は正直申しますと、それほど詳しく存じませんけれども、あの方はものすごく大きなキャパシティーを持っている人だということが、直感的に私は読み取れました。だからこそこういうインターナショナル・ハイウェイ・プロジェクトというものを、頭に浮べたに違いない。その時、取り越し苦労をして、こんなのうまいこといくやろか、いかないに違いないやろかと、悲観的なものの考え方、ペシミステックな考え方をする人間では、到底そういう考えは実現致しません。結局、非常な楽観主義でなければならない。楽観と申しましても、危険がないと言っている訳ではございません。失敗もございましょう。いかなる失敗があろうとも、危険がそこに迫ってこようとも、必ずそれを克服してみせるんだという、自惚れかもしれませんし、自信かもしれませんが、悲観的にものを考えたら、やる気は起ってまいりません。

結局、私だって、最初の南極越冬を実行したのでありますが、それまでには、一体先にどんなことが起るか判りはしません。先のことを心配したら何事もできやしません。その時にもし何事か起ったらどうするかといわれたら、その時になったら、窮すれば通ずるんだからいいじゃないかと考えました。証明してみろといわれてもできません。しかし自分が果してその時に、そういう危険にさらされ、困難に接した時に、創意工夫が出てくるかと言われたら、それは出てきますと私は言います。

もう一つ大切なことは、私が南極に行こうとした時に、あの当時まだ幼児であった人達が、自分で飴玉を買うお金を節約して、そのお金でもって私達の成功を助けて下さった。こういう期待と支援とがある中であったら、きっと神様は私に、その時知恵を授けてくれるに違いない。創意工夫を教えてくれるに違いないと、勝手に思っているんですけれども。しかしそう思った途端に勇気が出

てまいります。

私はインターナショナル・ハイウェイ・プロジェクトというもの、その中でも特に日韓トンネルという一番困難な問題、そこには困難に満ち、問題だらけだと思います。それは技術的な問題もありましょう。国際的な、政治的問題もありましょう。人間の感情の問題もありましょう。いろんな問題が山のように存在しているのに違いない。

しかし、私は「問題なき所には進歩なし」という考えを持っております。だからむしろロマンを追えば、必ずそこにある困難というものを、あえて迎え打つというのは大げさかもしれませんが、それを良しとして、その問題があるが故に進歩するんだよ、という気持でやってまいりました。私はこの人間の英知というもの、みなさんがお持ちになっている英知というものを信じます。またその大勢の方々の創意というものを、また私は非常に尊ぶものです。それらの方々の支援と会の助けというものがあるのに拘らず、物事が出来ない筈がないじゃないか、というふうにさえ思うのであります。

私は別にそれほど専門を持ってはおりませんし、また私は宗教的な何ものも強いものは持っておりませんけれども、しかし自分は人間である。人間の尊さというものをやはり自分で信じなければいけません。そして自分の人間としての尊厳というものを信じると共に、ここに居られるあらゆる方々の尊厳をも尊重しなければいけません。ましてや自分の国だけがいいんだということを考えることは間違っています。そこにはいろいろな世界の方々が住んで居られるわけです。その人はその人なりの流儀でもってやっているのです。それでいいじゃないですか。それらが一緒になってこそ、本当の力が出てくるのです。これを私は「異質の協力」という言葉を使ってみたことがございます。つまり同じ人間が3人寄ったって、そんなものは文珠の知恵は出てきません。違う人間がそこに寄り合って協力した時に、本当の力が出てくるのです。神様は決して同じ人間は御造りになっていらっしゃいません。みんな同じ顔しているように見えても、みな違う。ましてや人種が違えば当然違います。その違うものを造っておいて下さったんですから、そう違うという所をうまく役立たせるように、その神の恵みを、自然の恵みを私達は受けるべきではないでしょうか。私は勿論そういう意味で、不完全極まる人間です。欠陥だらけの人間です。またあなたも欠陥を一杯持っていらっしゃいます。その代り、良い所もきっと持っていらっしゃる。その良い所を持って私の欠陥を補って下さる。そういうようにして、そういう意味での協力というものを、これからやっていかなければなりません。

韓国と日本はそういう意味で一番近いお隣さんです。韓国にも癖があります。日本にも癖があります。ああいうやつだと思って交際をし、その足らざるをお互いに補い合い、そして協力した時に私は本当の力が出てくるのではないだろうかと、これはひいては韓国と日本だけではなくて、世界全体グローバルにものを考え、そこにインターナショナル・ハイウェイ・プロジェクトというものが考えられたということは、実にこんな私のロマンを輝かせて頂く問題の一つになると考えて、協力する気持ちになってきたわけでございます。

このように考えてまいりますと、先程私はみなさんの部会が既に着々と仕事をお進めになっていらっしゃるのを承わりました。端的に申しますれば、既に夢を離れ、あとはこれをどうしたら成功させるかということを、みんなで考えるしかないと思います。このプロジェクトは非常に金のかかる問題でもあります。その金をどうするかという問題に対して、それは日本政府が出したらいいじゃないだろうか。やれ何をやめてその金をまわしたらどうだ。それは結構なことですが、どこから出てくるでしょう。けれどももっと大事な事は、

私は国民の一人一人がそれぞれの気持でもって寄与するということが、非常に尊いことだとかねがね思っておりました所、今日司会しております中川先生が計算なさいますと、十分我々の力で国民だけの力だけでもやれるんだよということを証明されました。ましてやこれはインターナショナル・ハイウェイでございますから、外の国々の方々も御協力頂けましょうし、政府もそれを認めて協力するようになるでしょうし、私に言わすと、金の問題は心配しないでもよろしい。それよりか大事なことは国民全体がこの問題に対してサポートして下さることであろうと思います。

幸いなことに先程申しましたように、どなたもこなたも、みな大なり小なりロマンを追う心というものを持っておいでになります。植村直己があんな事して、冒険家といわれるような事をして、とうとう亡くなったようでありますが、これとても彼はあのロマンというものを持って、生涯持ちつづけ、これを見聞きした青少年、非常に純粋な心を持った人達が、やっぱりロマンというものに対する、一つの目に見えない、憧れと親しみとを持っていると思います。非常な関心を彼によせ彼を見ています。私の南極生活はささやかなものではありますけれども、これとても国民の多くの方々のロマンをあいつが叶えてくれたんだと、自分もやはり南極に行っているような気持ちになってくる。いささかでも持って下さったんだということは、昨年はタロー・ジローが話の中心になっております南極物語という映画がレコードを破った入りであったということに現れて居ります。これはひょっとしたら、ここにおられる方々は勿論でございますけれども、この日韓トンネルの夢という一つのロマンにいささかでも自分は寄与しているんだよ。一緒にこの日韓トンネルのロマンを味わおうじゃないか。まあ映画の入場料みたいなつもりで、いろいろな意味で資金を調達したら、それは可能であると中川先生の御計算があり、私も非常に意を強くしたのであります。

つきましてはこのロマンをどう考えるか。ロマンとか夢とか言いますと「なんだ夢見ているのか。馬鹿やろう。」ということで夢というものを蔑むような気持がある。しかしその夢というものは必ず叶えられると信じた時に、そこに実現するのである。決して夢が夢で終っているのではないんだと、消えてしまうんじゃないんだということを私は信じております。でありますから、これはどういうことかわかりませんけれども、お釈迦様が極楽というものを望めと言われたという話を聞いたことがありますけれども、しかし、お釈迦様がおっしゃる極楽というのは、どんなものかわからんですけれども。それを坊さんに聞きますと、蓮の上にあぐらをかいて、御馳走食べて、美女を侍らして、音楽を聞いて、お香の匂をふうっとかいで、そしてじっとしている。これが極楽やと坊主が言いますけれども、あれは坊主の言う極楽、坊主の言うロマンで、坊主が言う理想郷なんでしょう。私はそんな所にじっとしておられない。そんなの大嫌いでありますが、私にもし極楽がこんな所だと言われたら、針の山の初登攀でもしてやろうかと思います。それでいいんじゃないでしょうか。つまり、これをロマンと思えば別に癪にもさわりませんし、どんなロマンを持っていても、それはそれで批判の限りではないと私は思うのであります。あいつのロマンはけしからん。こいつのロマンはけしからんなんていうことを考える必要はありません。但し罪悪では困ります。ロマンというものは、そう正確無比なものではございません。つまり西の方向とか乾の方とか言うくらいのぼーっとしたものでいい、その間ならどこでもかまわない。

たとえばある山の頂に登ることだけが、ある人のロマン、夢であったとしたら、それを登っちゃったら夢は消えてしまうわけです。もっと大きな夢を持っていたとしたら、段々一歩一歩かなえられ

てゆきます。ですからこのインターナショナル・ハイウェイ・プロジェクトにしても、壱岐までの間トンネルこしらえた、でしまいと思ったらおもしろくない。対馬とまたそれから韓国、それから先へ先へと行ってですね、やってまいります。こうすると結構世界一周ハイウェイができるかもしれませんね。不可能ではないと思います。

これから先、人類は地球上での沢山の交通網としてのビックプロジェクトも行なわれるでしょう。運河も沢山できるかもしれません。逆にまたベーリング海をふさいでしまうということもあり得るかもしれません。そういう地球の表面だけの問題だけではなくて、海の底の問題だってあります。また宇宙の問題があります。これから宇宙にはちゃんとそういう基地ができるかもしれません。そこで住みつくかもしれません。あるいは月の世界に生活することができるかもしれません。そういうふうに夢というものは、いくらでも先を考えるべきものであろうかと思われる。そこに行く人がその一歩一歩を叶えてゆく時に、人間というものは本当に生き甲斐、喜び、感謝というものが湧いてくるのではないかと、私はそう思います。

今日こうやって夢を持ち、またロマンというものを心の奥底から盛々と持って下さっているこの大勢の方々がお集まりになって、そしてここに総会が持たれることは、私は歴史の一歩一歩がここに築かれているんだと思います。もう既に歩みは始まっているのでございます。どうぞこの人類の英知とでも申し上げる、あるいは本能とでも申し上げるものでございますけれども、これから先、あまり取り越し苦労をなさらず、こんなことしたらかえって戦争を進めるんではないだろうかとか、そんな事して儲かるかとか、青函トンネルをこしらえたけれども、一体何に使うのかとか、いろんなことを言います。私は「みんな何言っておるんです。未来なんてわかるのか」と言いたいです。未来は未知なのです。ですからこそ楽しいです。だからこそロマンがあるのです。しかもいかなる困難が現われてきても、常にそれは禍転じて福となすでやっていけるに違いない。それが人類というものなのだと思います。小さな諍いであるとか、あるいは小さな心であるとかいうものを捨て、もっともっとみんなグローバルに考えて、しかも違う人種の人達とお友達として、異質の協力をしていこうじゃありませんか。しかし自分の流儀を人に押し着けるということは、最大の罪悪であると私は以前から信じております。国家について言えば、内政干渉というものは最も悪い。自分の流儀を押しつけようとする人達というものは、それは我々は狭量、心の狭い人として、残念ながら、あまり愛することができません。

私はこのプロジェクトが本当に実を結ぶことを心から念願しております。先程も部会長の御発表にありましたように、このトンネル掘るのに、ひょっとしたら、下手すると60年かかるかもしれんという話も出ておりました。それだって英知を働かせることによって短縮することもできましょう。私は人類の英知というものを十分信頼しておりますが、残念ながら私はこの年齢でございますから、そんなに長いことかかるもの待っているわけにはまいりませんが、恐らくみなさん方の若い方々が、必ずこれを克服して下さるに違いないと思います。「問題のなきところには進歩なし」。幸い問題は山のようにあるではないでしょうか。お互い元気で禍も福となして頂きたいと思うのであります。

どうも失礼なこと申しましたが、私のささやかな経験を申しまして、私の話を終わらせて頂きます。